

イベントの記録

「公共建築の日」フォーラム

営繕計画課

営繕整備課

◆開催日：平成29年11月9日（木）

◆開催場所：札幌エルプラザ 3階ホール

主催：「公共建築の日」及び「公共建築月間」北海道地方実行委員会、北海道開発局

後援：北海道、札幌市、江別市、石狩市、（国大）北海道大学、（一財）北海道開発協会、（一社）北海道建築士会、（一社）北海道建築士事務所協会札幌支部、（公社）日本建築家協会北海道支部

公共建築に対して広く一般の方々にも関心を持っていただくことを目的に、平成15年より「公共建築の日」フォーラムを開催しています。今年度は120名の方に参加いただきました。

最初に、北方建築総合研究所地域研究部長の松村博文様より「人口減少時代の公共建築ストックの活用」と題し、人口減少局面での公共施設のあり方について、まちづくりの視点より活用事例を踏まえながら、地域活性化につなげていく上での課題と解決策へのヒントについて基調講演をいただきました。

続いて、「既存建築を利用した地域の再生～廃校の有効活用～」をテーマとしたパネルディスカッションを、松村部長をコーディネイターとし、パネリストに、大学で建築史意匠学を研究されると同時に設計者としても活動されている北海道大学大学院工学研究院教授の小澤丈夫様、廃校を複合用途施設に再生・活用した社会福祉施設の運営を行っている北広島団地地域サポートセンター「ともに」管理課長の向山篤様の2名を迎え、各々の視点から討論を行いました。

●基調講演

基調講演は「地域住民が活躍する場所としての施設作りが必要となってくる。その運営は、行政ではなく、住民が主体的に行うことが成功への鍵」とのお話で始まり、成功事例と失敗事例を交えながら「時代にマッチしたリノベーションとは、地域住民のニーズをとらえて、運営までをしっかりと考えたもの。ニーズがない場合は、保存のための保存はするべきではなく、むしろ、除却すべき」というお話もありました。最後に「既存建築の再利用は、試してみることができるのがメリット。ニーズとその後の運営を考えずに安易に進めると、必ず失敗する。知恵を絞りながら、本当のニーズをさぐっていくことで、施設が地域のコミュニティを作り直す強力なツールになっていく」とのお話がありました。松村部長の活用事例の本音や裏話を交えた講演に、参加者も大変引き込まれ熱心に聞き入っていました。



基調講演を行う松村部長

●パネルディスカッション

小澤教授から「リノベーションは特別なことではない。建物は殻を作るもの。建物内は、人のアクティビティに合わせてしつらえをする。そのしつらえはどんどん変わっていけばよい。設計者、建築に役割は、しっかりとした枠組みを作ること。」とのお話がありました。また、スイスやオランダでの施設の価値をあげるための取組事例を紹介され、使い手の自由度を高めたヨーロッパ建築の基本的考え方や、街づくりに対する行政と住民の関わり方についてのお話がありました。

一方で、過去の日本でも、畳や障子・ふすまを変え、引っ越しの際には畳を持って行くなど、木の家を長く使い続ける日本の家文化があったが、戦後の高度成長期に消えてしまったとのお話もありました。

向山課長から、施設が老人福祉施設としてだけでなく、子育て世代や小学生等が自然と集まる現況について紹介がありました。運営がうまくいっている秘訣は、当初のプロポーザル段階から住民と一緒にどのような施設にするか考え、さらには工事段階でも様々な方々と一緒に、現場見学を行い部屋の配置や使い方など細かな内容について検討を行ったこと等が紹介されました。特に「施設運営の一部を住民の方々にお願ひしてやってもらうのではなく、一緒に盛り上げようという気持ちで住民の方々が主体的にやってくれるようになるまで待つ」とのお話に、参加者も大変興味を引かれていました。地域づくりは、地域住民、行政、運営者が三位一体となって取り組んでいかなければならないという意見に、参加者一同納得していました。

討論の際には、参加されていた「ともに」の設計者から、運営者との長年にわたる関わりと、住民生活に寄り沿う運営者の姿勢に基づく空間づくりに心がけたことや、地方自治体の方からは、「地域のニーズをどう施設にとりいれていけばよいか」等、参加者を交えた活発な意見交換が行われました。

最後に、コーディネーターの松村部長が「建築の力、運営の力、どちらか1つだけではうまくいかず、どちらも必要である。行政は、住民の意見を上手に引っ張り出せる仕組みを作ることと、横の連携が大事である。」とまとめてパネルディスカッションが終了しました。



パネリスト 小澤教授（左）と向山課長



質疑を行う聴講者